

国立東京療養所にて

取税人ザアカイ

――ルカ伝第19章1～10節――

1957年4月28日

小池辰雄

エリコを過ぎゆくイエス 前に走りゆき、桑の樹にのぼる 今日われ汝の家に宿るべし キリストに近づくこと 主を迎えて心砕けたるザアカイ 失せたる者を尋ねて救わんために

【ルカ19・1～10】

1 エリコに入りて過ぎゆき給うとき、²視よ、名をザアカイという人あり、
取税人^{かしら}の長にて富める者なり。³イエスの如何なる人なるかを見んと思えど、
丈矮^{たけひく}うして群衆のために見ること能^{あた}わず、⁴前に走りゆき、桑の樹にのぼる。
イエスその路を過ぎんとし給う故なり。⁵イエス此処に至りしとき、仰ぎ見
て言いたもう『ザアカイ、急ぎおりよ、今日われ汝の家に宿るべし』⁶ザア
カイ急ぎおり、喜びてイエスを迎う。⁷人々みな之を見て^つ咥^おきて言う『かれ
は罪人^{つみびと}の家に入りて客となれり』⁸ザアカイ立ちて主に言う『主、視よ、わ
が所有^{もちもの}の半^{なかば}を貧しき者に施さん、若しわれ誣^しい訴^うえて人より取りたる所あら
ば、四倍にして償^{つぐ}わん』⁹イエス言い給う『きよう救いはこの家^{きた}に來れり、
此の人もアブラハムの子なればなり。¹⁰それ人の子の來れるは、失せたる者
を尋ねて救わん為なり』

●エリコを過ぎゆくイエス

このザアカイのお話は、ルカ伝特有の記事で他に平行記事はない。

イエスがエルサレムにのぼられる途次においてエリコの町を通り過ぎようと思われまし
た。エリコという町は、当時ローマの一州であるところのユダヤの東の相当、重要な町で、
今でいうと税関所みたいなものがあり、その税関所の取税人^{かしら}の長にザアカイという人が
ありました。ザアカイという名前は、旧約から来ておりまして、「純潔」「罪なき」ということ。
彼は取税人のかしら税関吏の長で、当時、ローマの官憲の手先となつてゐるわけですから、
ユダヤ人には非常に嫌われ、そして自分の懷を肥やしているいわゆる「取税人で富める者
なり」と特に書いてあるわけです。

イエスの如何なる人であるかを見ようと思つたけれども、背丈が低くて群衆のために見
ることができない。イエスのことは既にうわさで充分聞いていたので、



「どんな人だろうか？」

と、とにかく当時の一代の預言者イエスを見ようと思ったわけです。

ところが、このザアカイという人は、普通いう取税人とはちよつと人物がやはりどこか違っていたと思われます。取税人の長であるならば、もう少しその振舞いも勿体ぶつているところなんでしょうけれど、それとは反対に、

「前に走りゆき、桑の樹にのぼる」

といういかにも卒直な人柄だったのです。

当時、キリストがエルサレムに上られる時には、もちろんガリラヤの方から、いわゆる「原始使徒」たち、それからまだほかの弟子たち、たくさんの女の人たち、また過越の祭の時ですから、多くの群衆がぞろぞろ半分、物見高について来てこれを迎えたわけで、イエスがなかなか見えない。それで、前に走って行って桑の樹にのぼりました。キリストがそこを通りかかろうというので――いわゆる昔の大名行列ではとても上からなんか見ようものなら大変な事です――ザアカイはこの預言者を迎えるのに、「桑の樹にのぼる」という人の意外に出たわけです。

「イエス此処に至りしときに、仰ぎ見て言いたもう」

イエスの方が逆に、ザアカイの方を仰ぎ見た。樹の上に登った奇人がいるわけですから。

「ザアカイ、急ぎおりよ、今日われ汝の家に宿るべし」

さあ、どうしてこのイエスはザアカイという名前をご存知であるか。あるいは、その人物、ザアカイの事は聴いていらつしやったかも知れない。けれども、この樹上の人がザアカイであるということを、どうして知られたか。普通の常識では、ちよつとわかりません。とにかく、イエスはいきなり名を呼ばれまして、

「さあ、早く降りて来い。今日、私はお前の家に宿るんだ」

と。ザアカイが急ぎおりて、喜んでイエスを迎える。ところが、人々がみな之を見て眩い（つぶや）て言うのに、

「かれは罪人（つみびと）の家に入って客となった」

一般の判断からいうと、取税人の長なんてのは罪人という判断の中に入るの、

「あの私腹を肥やしている連中の仲間であるザアカイ、この罪人の家に入って客となるとは！」

と。このザアカイが、「前に走りゆき桑の樹にのぼる」という、自分の身分とか、いろいろな体裁とかいうものを考えないで、他人にどう言われようが、そんなことはもうすっかり乗り越えてしまつて、とにかくイエスという人物を見たさの一念に一切の他念を捨ててしまつて、ただこの一念の故に、「前に走りゆき、桑の樹にのぼる」という彼の行為に、私たちは深く注目しなければならぬわけです。



●前に走りゆき、桑の樹にのぼる

今日も此処にお伺いすると、前の方に並んでいらつしやる方もありますが、うしろの方にいらつしやる方もある。この福音というものはやつぱり、

「前に走りゆき、桑の樹にのぼる」

という態勢をもつて、皆さん、ぶつかって来なければダメなんです。

私たちが集会を持つということは、どこまでも、ザアカイのような態勢をもつてこの福音の世界に入ることです。この気合が非常に大事なんです。実は、信仰とは何かというと、

「前に走りゆき、桑の樹にのぼる」

ということなのです。信仰は即ち、全身の投入であると申します。私は、いつもこれを申しております。ザアカイの「前に走りゆき、桑の樹にのぼる」という行動が彼の信仰告白であつた。もちろん、彼はイエスを信じてはまだいないでしょう。信じてはいませんけれども、彼も求めている。

「求めよ、さらば与えられん」

というが――しかもこれは単なる好奇心であつたかも知れないけれども――とにかく、この時のザアカイというものは、それが好奇心であろうが、求めであろうが、彼はとにかく何がなんでも、このイエスという人物を見たいという一念でもつて、前に走りゆき、桑の樹にのぼつた。この^{たましい}霊魂の気合です。

彼がどれだけの信仰があつたか――彼にはいわゆる信仰はなかったんでしよう――けれども、彼の霊魂がそのように、幼な児のように「走りゆき」という。謂わばそれは、

「お母さんが帰つて来た！ さあ、出向かえよう」

といつて、ちょこちょこ歩き走つていく小供のように、

「イエスを迎えよう、見よう」

と前に走りゆき桑の樹に登つた。これが即ち、「求め」なんです。本当の分裂のない求めです。この分裂のない求めというものが大事なんです。体裁を考えてはいけけない。一切の雑念をのり越え、ただ一念となる。正に全身が即ち一念となることです。この一念の態勢が求めでして、

「求めよ、さらば与えられん」

というのは、このようなザアカイのような求めなのです。

キリストはザアカイのこの心の、魂の方向、これを非常に喜ばれた。殊にそれは取税人の長ザアカイである。自分は今、エルサレムに向かつて行き、もうこれから一週間もすれば十字架という時です。その時に、彼がこの途次において、実にザアカイの家に立ち寄ろうなどとは、キリストも思つていらつしやらなかつたでしょう。ところが、この者にぶつかつて、これを本当に救うという場面です。キリストはザアカイのこの姿を見て、ぐつとこれを受けとられた。



人生には大事な瞬間がある。その瞬間を捉^{つか}まえるか捉まえないかは、その人の生涯に大きな開きを来たすものです。そういつた瞬間に対しては、本当に全身を投じて、何がどうなつてもそいつに向かつていくことです。

「今度の集会は何があつても、私はもう出ないではいられない」

という気持で出てくる。そういつたような気持をもつて臨まないと、せつかく来ましても、それは分裂した気持ではどうにもならない。その代り、本当にそのようにして全身を投じたならば、一回でもつてその人は人生の大転回を起こし、そして、新しい展開が始まるということになります。私自身、語りながら、そうなのです。決して私は教えているわけではありません。集会は誰でもがみなひとしく、キリストに向かつて進むこと、キリストにつかまえられることなのです。どうか、

「前に走りゆき桑の樹にのぼる」

というこの一句をよく凝視し、瞑想し、このザアカイの靈魂^{たましひ}になる。私たちはザアカイを見ているのではない。私たち自身がザアカイとなつて前に走りゆき桑の樹に上るのです。

今、現に私たちは原始福音体なるキリストに向かつてこうやって進みつつあるわけです。

「イエスその路を過ぎゆかんとし給う故なり」

この過ぎゆくイエスに――今、過ぎて行つてしまつたら、もう見えないんですから――その過ぎ行く途上でこの瞬間をつかまえようとしたこのザアカイ。さきほど申した如く、それは彼は信仰に入りたいということではなかったのでしょうか。イエスという人を親しく見たかつたんです。そうしたら、イエスの方からこれを仰ぎ見て、

「ザアカイ、急ぎおりよ、今日われ汝の家に宿るべし」

と。ザアカイの好奇心や求めよりもつとつと深いことを、キリストはいきなり言われたわけです。

●今日われ汝の家に宿るべし

「急ぎおりよ、今日われ汝の家に宿るべし」

なんて、こんな言葉をいきなり発し得る者は、これは普通の人間の先生ではない。これは本当に神の子の言葉です。ザアカイは、自分が求めた以上のことを言われて驚いた。ザアカイは嬉しい。即ちイエスはザアカイを見て、

「ああ、この男は本当に純粋な靈魂^{たましひ}、救わるべき靈魂である」

ということを見る。

人間は皆いろいろです。けれども大事なことは、その人がある瞬間に、本当に分裂のない靈魂になれるかなれないかです。分裂のない靈魂になつて、ぶつかるころの気合。あるがままの、分裂のままの、自分をそのままぶち込むことが本当なんです。自分の気持をなにかとりすまして行こうとしたつて、これはダメです。いわゆる「真実」というような



ことで大いに力みこんでも、これもダメです。こわばっちゃうです。でなくて、もう行き詰まりなら、行き詰まりのまんまでいい。よく悩んだり行き詰まったりすると、

「ちよつと今日は敷居が高いから先生の集会には行きかねた」

なんて言っている。そうではない。行き詰まったり、苦しかったりしている時こそ、そのまま来ればいい。そういう者を神さまはつかまえようとして、そういう者を尋ねておられる。

「病める者が医者を要す。健やかな者は、要らない」

と。私たちは本当はみんな病める者です。キリストは、そういう私たちを今度は本当の健やかさにしようとなさっている。これが神さまの尋ね求めなんです。ところが、人間は、自分が分裂したり、転ろがったり、苦しんだりすると、とかくひっこみ思案になり、隠れようとする。そもそも、アダム、イヴは樂園でもって、隠れちゃったでしょ。神さまに対して隠れん坊したって、そりやダメですよ。創世記の3章に書いてある。

「エホバ神、アダムをよびて之に言いたまいけるは汝は何処いずこにおるや」

人間はとかく隠れてしまう。

「どこに居るか？」

といって、神さまはとがめない。神さまはその悪いところは知っていらつしやる。それはもちろんある時は指摘もなさいます。けれども、それは決してさば審く為ではない。本当にそれを包み、それを赦し救ってしまうために、神さまは私たちを探しておられる。こちらに何か悪いことがあって、

「神さまから呼び出しをくらつたらこりや大変だ」

と、なおさら隠れたらどこに救いがあるでしょうか。神さまが呼び出そうとする時には、

「ああ、そうか、よしよし」

というわけで、それを最も正しい角度からゆる赦してください。そして、それを包み救ってくださる。これが神の呼び出しです。人間の呼び出しは審くためだけでも、神さまの呼び出しは赦うためです。さて、

「急ぎおりよ。今日、われ汝の家に宿るべし」

この「べし」は、いつも申し上げているギリシヤ語の「デイ」という字で、「宿らないではいられない」という強い言葉です。

「私は、今日はお前の家にどうしたって宿るよ、宿らないではいられないんだ」というのです。

「我、今日も明日も次の日も、進み行くべし」（ルカ13・33）

というのも、「行かざるを得ず」という心で、あれもそうなんです。しかも、「今日われ汝の家に」で、明日ではない。今日、今、これから、お前の家に行って宿る。この「宿る」という字がこの間、ルカ伝の24章のところでやった、

「我らと共に留まれ、時夕に及びて、日も早や暮れんとす」



という「留まる」は「宿る」という字と同じ字です。またヨハネ伝15章の、

「わが愛に居れ」

と、「居る」という語も同じ「メネイン」という語です。私たちに對するこの福音は、聖書の中のキリストの迫りというものはいつも、

「私たちの中に入って来たい。私たちの中に来て宿りたい」

との迫りで、ヨハネもパウロもペテロも、遂にそのようにキリストがうちに宿って戴いた人たちです。クリスチャンとは何か。これは、キリストを宿す者なんです。ローマ書の8章9節にも原語は少しちがいますが、

「然れど神の御霊なんじらの中に宿り給わば、汝らは肉に居らで靈に居らん、

キリストの御霊なき者はキリストに属する者にあらず」(ロマ8・9)

とあります。「御霊」というのは、御霊のキリストですよ。

「み霊のキリストを宿さざる者はキリスト者にあらず」

とパウロは言いました。どんなに立派な信仰的告白ができていても、また、どんなに聖書の知識がありましても、み霊のキリストを宿さなければ、これは聖書がいうところのクリスチャンではない。神のことを知り、聖書を知り、みな結構なことですけども、この肝腎なみ霊を宿さなければ、本当の生命がないというわけです。生命の問題になってくると、これはどんな答案を書いてもダメなので、

「その人の全存在が即ちキリストを宿している」

ということにならなければダメです。どんな偉い先生に大鼓判をおされても何にもなりません。またどんなに他人に誤解され、迫害されようとも、本当にキリストを宿していれば、それで天国へは及第です。

問題は、この「神・キリスト・我」という関係において、本当にキリストを宿しているかです。キリストを宿しているか否かの最もたしかな証拠は、その人が本当の愛の人かどうかでわかるのです。

このキリストを宿すためには、あるがままの自分が桑の樹に登ればいい。桑の樹に急ぎ走りゆき、登るが如くにキリストに体当たりして行けば、イエスは無条件に――その人がどんなに今まで悪いことをしましうが、その人が今どんなに分裂であろうが、どんなに穢れていようが――おのれをのりこえた、おのれをうち忘れたこの一念を、キリストは100%に受けとってください。今までの業績も資格もなんにもいらぬ、今の惨憺たる我でよろしい。ただ、本当に全身をもって走りゆき桑の樹に登るか。手だけが桑の樹にのぼるわけにはいかん。足だけがのぼるわけにいかん。全身をもって樹にのぼっていく。

「ザアカイ、急ぎおりよ、今日われ汝の家に宿るべし」

というこのキリストの言葉が、皆さんに今、現に聴こえて来るんです。皆さん、

「あの人の所にキリストは宿るかも知れないが、私のところには宿りそうもない」



ではないですよ。キリストはここに何人いようが、一人ひとりに100%に宿る。み霊の世界というのはそういうんです。私たちの毎日の生活も、気合はこれですよ。今！キリストを迎え、また今晚キリストを迎える。そのように、

「自分の一切はこのキリストだけだ」

とキリストを受けて、他の何ものも顧慮しない。左顧右眊せず、自己も見ない。唯見んと欲するものは全身これ眼となつてキリストを視る。全身これ耳となつてキリストを聴く。これが即ち、「前に走りゆき桑の樹にのぼる」ことなのです。これを受けとめてキリストは、

「今日われ汝の家に宿るべし」

と。これを実存的な気合というのです。一切を乗り越えて、キリストが中に入ってください。そうしたらば、そこから全ての問題は、自然にキリストの光が、キリストの力が、キリストの愛が溶かしてくださる。そこで解決しない問題はひとつもない。どんな惨憺たる現実が来ましても、キリストを宿せば必ず勝利します。隠れることはない。キリストは、尋ね呼び求めることにより、入ってください。ルカ伝15章で、放蕩息子を待っていた父の心です。嬉しいですね。だから、

「急ぎ降りて、喜びてイエスを迎う」

と。福音の世界で喜びが来なかったらウソですよ。ところが、クリスチャンが考えてばかりいたら、神の国には入って来れないんです。

「人々みな之を見て眩くらきていう」

さあこの眩くらきというやつ。これは聖書によく出てくる言葉で、パリサイ的批判の人たちがこの眩くらきということをやする。己おのれを義よとしてゐる連中が、この「眩くらき」というのをやる。「眩くらき」はまた、「妬ねたみ」やなんかとも通じます。まことにさもししい気持です。

●キリストに近づくこと

ヤコブ書の4章5節に、

「聖書に

というのは旧約聖書に、

『神は我らの裏うちに住ませ給いし霊を、妬ねたむほどに慕おほいたもう』と言えるは虚しきことと汝ら思うか。神は更に大なる恩恵めぐみを賜う。されば言う『神は高ぶる者ふせを拒へりくぎ、謙へりくる者に恩恵を与え給う』と。この故に汝ら神に服したがえ、悪魔に立ち向かえ、さらば彼なんじらを逃げ去らん。神に近づけ、さらば神なんじらに近づき給わん。』（ヤコブ4・5～7）

人間の最高のところは、一番奥の深いところはこの霊の世界です。この霊が本当に生命を得るまではダメなんです。私たちの霊魂、プニューマが、神さまの世界にスイッチを開くまではダメです。その霊がほかのものにとらわれている。名誉だとか、地位だとか、財



産だとか、健康だとか、学問だとか、芸術だとか、いろんなものにとらわれている。みんな悪いものではないですよ。地位も結構でしょう、学問も、芸術も、健康も、財産もみな結構でしょう。それ自体、悪いというのではない。けれども、人間が造り出したどんな立派なものもどんな美わしいものも、どんなに望ましきものも、一人の人間の靈魂をどうにもできない。靈魂がそういったものに売られてはダメです。そういったものに囚われ、そういったものの奴隷となっているうちはダメなんです。

どうか、皆さんの靈魂を本当に神さまに対して開放してください。即ち、他のものに囚われていることに、

「神さまは妬みをおこし給う」

という面白い言葉で言っている。

「我エホバは妬みの神である」

という。「妬みの神」(エール・カンナー)といいまして、この「エール・カンナー」という言葉は「妬み」というように訳してもいいけれども、これは「熱愛の神」、白熱の愛の神です。神さまのこの白熱を、神の愛を本当に受けなくては。それを他のものでもって切り換えたらもつたない話ですよ。正直、私たちの靈魂は、本当に

「私は死んでも死なない」

と言えるか。言えない！ 本当に「私は歓喜である」と言えるかという、言えない。なにかその蔭に深い空虚と、寂しさと、行き詰まりとを伴っている。ところが、そのような靈魂が神の愛に対して、愛をもつて求めていくような姿がこの

「前に走りゆき桑の樹にのぼる」

という態勢である。キリストというものに向かって行く。神に向かって、神の熱愛に向かつて、こちらがとにかくそれに向かって、一切を乗り越えて行こうという、この態勢。

神に近づいても、私たちは、神さまが近づいて下さらなければ、結局はダメです。けれども、神さまの方は人間を物に扱っていないのですから、神さまに近づこうとする意志がなければダメです。たとえば、尻もちをついて一歩も近づけなくても、一寸も動けなくても、全身が床の上にいましても、神さまに近づける。しかし、どんなに走っても、これは神さまに近づいているのでもなんでもない。神に近づくとは、ただ本当に靈的現実のことをいうのであって、私たちはどんなにじつとしていても、神さまに近づくということは、即ち祈りの世界においてできるのです。祈りの世界で神に近づく。そうすれば神さまはちゃんと来ていらつしやる。

「天国は近づけり。悔い改めよ」

と。救いは既に来ている。万人に救いは臨んでいる。天国は近づいて、神さまの国はキリストを通して来ているんです。だから、

「悔い改めよ。方向転換して、キリストに近づいてごらん。あの吸引力に向かって



歩いてごらん」

と。歩き出したら、だんだん加速度がついて来る。だからヤコブ書は、

「神に近づけ、さらば神なんじらに近づき給わん」

と書いてあるけれども、

「神は既に近づいて居たもう。故に汝ら近づくことを得べし」

なんです。「神に近づく」ということは、

「自分を乗り越えて行く」

ということですよ。自分を高くしている人は近づけない。神に近づくという人は、己れを捨てていく人なんです。己れを棄てていく者でなければ、神に近づくことはできない。即ち、神に近づくという衝動は、いよいよ低くということになる。

それで、私は皆さんと共に原始福音に近づいていく。聖書が申しているところの福音に近づいているんです。

「私は福音を掴^{つか}んでいる」

なんて言っているのではない。ただ私は限りなくこの福音の中に入って行きます。

「私は一番深く聖書を掴^{つか}まえている者です」

なんて、どこにも言った覚えはないはずですよ。そんなことになったら、とんでもない傲慢です。私たちは限りなく、このキリストの中に、聖書の中に、福音の中に近づき、進み、入っていくだけです。立場も、主義も、主張も何もございません。いわゆる「信仰」もございません。何もございません。私は十字架ですっかり何もないものにされました。自分で何もなくなったわけではありません。

「霊の貧しき者は幸福^{さいわい}なり、天国はその人のものなり」

キリストは、自分を乗り越えて限りなく進もうという人に限りなく入って来てくださる。

こここのところを間違えては困る。私たちは、

「宗教改革もなにも乗り越えて、福音の世界に行きましょう」

ということは、

「私たちが一番正しい福音を掴^{つか}んでいるから」

なんていう意味では絶対にない。私たちはただこの中に入って行きます。神さまを証している人たちがたくさんあります。それぞれ結構です。それぞれの役割がある。それで、私たちは自分たちの何かを肯定しようと思わない。ワクを作ろうと思わない。ただ、我々に示されているのつぴきならない道を進ましめられていくだけです。

「我々を通して現れ給うところの限りなき世界を誤りなく現わしたい」

という、この一念だけです。どうか、そういう悲願をもっていくのであって、私たちのグループというものが、サムシング (something 何ものか) になつてはダメです。

皆さん、主義も主張も立場もなんにもなくなつてくるといふと、本当に強くなる。本当



に豊かになるんです。その豊かさ、強さというのはキリストのものですから。私のものではないですから。私はまだまだその受け方がダメだから、ただ本当に

「あの使徒たちのようにいよいよなっていきたい。そしてキリストの証をしたい」ということなので、皆さんもその実存をもつてやってください。

「ここがいい、これでよろしい」

なんていう地点はどこにもない。死に至るまでない。けれども、瞬間毎に本当に生かされていく。そういう不思議な世界ですよ。いつ死んでも、「アーメン、ハレルヤ！」ということ。この充満があるからこそ、いよいよ限りなく進ましめられる。これが単なる理想主義だと、

「今はまだ欠けているから、これをだんだん満たして、現実を理想に近づけていきましよう」

といって、これでは努力しているうちに疲れてしまう。

いよいよ進み進ましめられる、そのゆえんのもものは、私たちの中に本ものが常に溢れて来るから、いよいよ進ましめられる。そういった未完成の完成といえますか、完成の未完成といえますか、そういったような世界がこの福音の実存の世界です。私たちを栄光より栄光へ、力より力へ、恩恵より恩恵へ、真理より真理へと、駆り立てて行つてくださるのは、駆り立ててくださるキリストがこの胸三寸の中に入つてくださるからです。キリストがここにおいて生き、動いてくださる。

そういう世界においてこのザアカイが求めていったように、私たちは福音を限りなく桑の樹にのぼつて求めていけば、キリストは毎晩毎晩、毎日毎日、私たちの中に入つて来て、

「さあ、私と一緒に進もう、一緒に暮らそう」

というのです。これが即ち、

「汝の家に宿るべし」

です。

「彼は罪人の家に入りて客となれり」

なんて何を咥つぶやいているか。私たちは五十歩百歩の人間、みんな罪びとです。キリストがこれを本当に救おうという時に、一方では己を義人として、「罪人の家に宿るか」とつぶやくとはとんでもない高慢です。これは、近づき求める靈魂でないからです。

●主を迎えて心砕けたるザアカイ

8 ザアカイ立ちて主に言う『主、視よ、わが所有もちものの半を貧しき者に施さん、若しわれ誣うったい訴えて人より取りたる所あらば、四倍にして償つぐなわん』

普通は施しをする時は二割くらいなもんだそうですが、彼は自分を本当に投げ出した気持ちになつて来た。即ち、キリストを受けとると、その証あかしとしてのこれは本当に彼の信仰告白です。



「ザアカイはどれだけの慈善を施したか、施さないか」

ではない。彼のこれは感謝の気持ですよ。懺悔であり、感謝である。それで、四倍にして償う。この「償わん」とか「施さん」というのは現在形で書いてありまして、非常に強い意味です。「大丈夫、そういたします」ということ。真の悔改は恵みの主を迎えてはじめて始まるのです。それが感謝となり奉仕へと展開します。それで、

9 イエス言い給う『きょう救はこの家に来れり、^{きた}

ザアカイは本当に、

「自分はあなたを迎えてこんな嬉しいことはない」

と言って、もう他のものはどうでもいいということになったから、彼は本当に感謝にあふれました。信即行、信即ち告白となつていく。信即ち証^{あかし}となつていく。ザアカイは、

「さあ、私はもう職を捨てて」

なんて力まない。取税人は取税人でいいです。皆、それぞれの職業でいい。そのまま、あるがままにおいてそこに天国が現じる。

9 イエス言い給う『きょう救はこの家に来れり、^{きた}此の人もアブラハムの子なればなり。』¹⁰それ人の子の来れるは、失せたる者を尋ねて救わん為なり』

私たちの救いは、自分を投じてキリストを無条件に迎えた、その瞬間に救いは来る。誰にでも来る。無条件に来る。

それは、申し上げている通り、キリストの十字架です。キリストはまだ、十字架にこの時はかかつていらつしやらない。十字架にかかつていらつしやらないキリストが、

「今日、救いはこの家に来たれり」

ということを仰られるゆえんのは、すべてキリストの言葉は、未来完了をそこに現在完了にしておられる。

私たちはまだ救いは全うされていませんよ。十字架のキリストの贖罪を信じ受けとつても、現実には救いは完全に全うされてはいない。しかしながら、その全き質、種は、霊の核は、^{れいし}霊子は――電子ではない。こんな言葉は、私は今日初めて使う――^{れいし}霊子というのが私の中に入つて来て、これは必ず私をキリストの像に^{かたち}化さしめてくださる。皆さんをキリストの像に化さしめてくださる。これは絶対に勝利する。キリストを受けとつた者は、その勝利が確かであるから、それは、それが来ているから、私たちはどんなにうろたえたり、躓いたり、転んだり、滑つたりいたしましても、どっこい、^た起ち上ります。決して、うしろへ退かない。これは力みでもなんでもない。これはキリストの霊子が推進力なんです。原子核よりはるかに素晴らしい霊子核がありますから。この霊子核が来ているから、

「今、救いはお前たちの中（家）に臨んだ」

と。キリストの十字架がすっかり私をすつとばして下さつて、復活の生命が来ているから、今日、今この救いは私のうちに来た。必ずそれは全うされる。私たちもアブラハムの子です。



「人の子の来^{きた}れるは失^うせたる者を尋ねて救わん為である」
ということですよ。

●失せたる者を尋ねて救わんために

ところが本当はみんな失せている。「失せたる者を尋ねん」という。失せないような顔しているけれども、みんな実は失せている。失せたる者である。パラダイス・ロストの間であることに早く気付くことです。みんな気が付かないで、偽わりのパラダイスばかり持っているから。本当のパラダイスは、キリストを迎えるまで来ないんです。ところが、

「パラダイスの失せたる者を尋ねて、それにパラダイスを与えんが為に、救わんが為に来た」

とキリストは言われるのです。同じルカ伝の23章39節から読みますと、

「³⁹十字架に懸けられたる悪人の一人、イエスを譏^{そし}りて言う『なんじはキリストならずや、己と我らとを救え』⁴⁰他の者これに答^{こた}え禁^いめて言う『なんじ同じく罪に定められながら、神を畏^{おそ}れぬか。』⁴¹我らは為^なしし事の報^{むくい}を受くるなれば当然なり。されど此の人は何の不善をも為さざりき』⁴²また言う『イエスよ、御国^{みくに}に入り給うとき、我を憶^{おぼ}えたまへ』⁴³イエス言い給う『われ誠に汝に告ぐ、

今日なんじは我と偕^{とも}にパラダイスに在るべし』(ルカ23・39～43)

最後の瞬間に真つ先にキリストと一緒にパラダイスに入ったのは、誰あらん、この盗賊である。キリストは失せたる者、パラダイスを失った者にパラダイスを与えんために来られた。このキリストというパラダイスが入ったならば、ザアカイの家はどういうことになったんですか。

「今日、救いはこの家に来たれり」

と特にあるでしょ。即ち、ザアカイ一人が救われたことによつて、その家全体が救われるようになっていく。皆さんがこうやって、本当の救いに入れば、この東療に救いが来るのです。皆さんは救いの酵素になるわけです、パン種に。そのパン種になって、ふくらまっていくなわけです。

このザアカイの一件はまことに劇的な場面です。この劇中において私たちはザアカイとなり、ザアカイの靈魂の一念というものが即ち、キリストに捕まえられた。どうか、どんな瞬間にでも、どんな行き詰まりにおいても、この一念となつてください。ザアカイの一念になれない如何なる事態もない。そうしたらば、ザアカイと共に突破して、必ずキリストはその瞬間に宿り給う。人生は行き詰まりにおいてこそ懸崖絶後に絶すると、本当に行き詰まりどころでない、無限の開示が与えられる。これ、十字架・復活・み霊のキリストの為に給うところなのです。ハレルヤ！

(『愛泉』誌第14号、1957年9月1日発行より転載)

